

とでした。家主さんとしても不動産屋に出せるような物件ではなかったわけです。不動産屋を通していたら、更地にするなり、建物を改修するなりに相当な投資が必要だったはず。荷物もそのまま置いてあつて家主さんも『困ったな、どうしよう』という状態だったと思います。

家主さんは管理に困っていた、私たちはきれいでなくていいから安く借りられる場所が欲しかった。それぞれの希望が折り合ったところで、家主さんの荷物は置いたままそのまま使うこと、改修は自分たちですること、などを直接話し合つて約束できました。そこに不動産屋が入っていたら、こうならなかったでしょうね」

さらに心強いことに、岡本さんが参加していた子育てサークルや地域の福祉グループの活動を応援していた生協エスコープ大阪の後押しもあった。家主との話し合いはすすんで

いたものの、法人格のないふらつとが契約者になることは難しかったため、2004年にNPO法人を取得するまで、生協が契約主体になってくれたのだ。家主と借主の直接交渉、家主の荷物を置いたまま借りること、不動産のまた貸しなど、業界では考えられないことの連続だった。

いまでは行政の委託事業収入があり、事業もある程度、安定しているが、もともとは「自分たちの居場所が欲しい」という思いで始めた活動なので、ふらつとの参加メンバーは報酬をもらうどころか月50000円ずつ出し合っていた。はじめに8万円に設定された家賃も、事業収益がなかった時期には、5万円、3万円と払える額への値下げにも応じてもらえた。家主との信頼関係に基づく直接交渉ならではのことだ。